

HUNGER



UNITED COLORS
OF BENETTON.



WFP
United Nations
World Food
Programme

現在、世界中で8億人以上が飢餓に苦しみ、毎日2万5,000人が飢えで亡くなっています。これは3.5秒に1人が餓死している計算で、その累計は過去50年間で4億人にのぼります。（この数は米国、ドイツ、フランスの人口の合計に相当します。）そして、世界のどこかで5秒ごとに1人の子どもが死んでいく一方で、12トン近くの食糧が廃棄されているのです。

8億人の飢餓人口のうち、およそ6,000万人が餓死の危機にさらされています。彼らは緊急の食糧援助がなければ生き延びることができないほど深刻な状況にあります。残りの方々も、次の食事を確保するだけで精一杯の非常に貧しい生活を送っています。彼らの窮状を私たちがテレビ画面で見ることはありませんが、その陰にはマスード（表紙写真の少年）のような貧しい人々がた

くさんいるのです。彼らにとって、WFP 国連世界食糧計画（以下WFP）が実施しているような援助プロジェクトは、単なる食糧援助に留まりません。これらのプロジェクトは、貧しい人々の教育、自活、安定した生活の促進や、難民の帰還の支援、搾取されている子どもたちの救済といった活動を通じて、人々に日々の窮状の悪循環を断ち切るための機会を提供しています。

これからご紹介するマスード、アグネス、カディアツ、カリクたちの話は、30分ほどで読めるでしょう。しかし、その間にも500人以上が飢えで亡くなるのです。

UNITED COLORS
OF BENETTON.



女性よ、家から外へ出てはならない。もしも女性が自己顕示のために着飾り、きらびやかでぴったりとした、魅力的な衣服で外出した場合、彼女たちは呪われるだろう。

アフガニスタンのタリバン美徳推進・悪徳抑圧省宗教警察により1996年に発表された布告

タリバン統治下のアフガニスタンでは、白いソックスを履くことは宗教法違反でした。美徳推進・悪徳抑圧省が1996年から2001年まで施行したこの禁止令を犯せば、金属のケーブルや銃床の部分などで殴打されました。また、音楽、ダンス、ラジオ、風揚げなども禁止になりました。女性はマフラムとよばれる親族の男性の付き添いがなしでは外出できず、外出時にはブルカの着用が強制されました。女性は外で働くことも禁じられたため、未亡人など一部の女性は、家族を養うことが困難になっていきました。

1980年代、共産主義政権下のカブールでは、戦争に召集された男性たちの代わりに、女性がさまざまな仕事の欠員を埋めました。1990年代の初頭には、首都カブールの学校教師の約70%、政府職員約50%、医師の約40%を女性が占めていました。しかし、1992年に共産党政権を打倒した武装ゲリラ、ムジャーヒディーンの兵士がカブールを占拠し、市内の女性をレイプし暴行を加え始めてから、女性の暮らしは一変しました。その後、タリバンがムジャーヒディーンを一掃し5年間にわたって国土を支配しましたが、そのタリバン政権も2001年に米国主導の軍事作戦により崩壊しました。

アフガンの女性は、今また家の外での生活を考えられるようになりました。職場や学校へ復帰した人もいますが、まだ恐怖に怯えている女性もいます。今でもカブールの通りには、ブルカなしで外出することに抵抗を感じる女性たちが大勢歩いていますが、その姿はまるで形も顔もない青い幽霊のようです。「娘や妻や母親を職場へ行かせたくないという家族は今でも多いのです」と、ジャーナリストのサリハ（6ページ、左写真）は説明します。「タリバンは男女双方に

大きな影響を及ぼしましたから、状況が進展するにはまだ時間が必要です。でも、これこそ私たちが変えなければならないことなのです。ブルカのようなものを着なければならないなんて、我慢できません。イスラームでは身体は覆わなければならないかもしれませんが、顔や手は見せてもよいとされているのです。」サリハは、カブールの女性課題省で、弁護士や会計士、ジャーナリスト、教師など285名の女性公務員と共に働いています。この女性課題省は、アフガン社会における女性の社会的役割の向上を目的に設立されました。ここでは、ブルカは帰宅時間までバッグに入れるかフックに掛けておき、帰るときも、多くの女性は頭にスカーフを着用するだけです。アフガニスタンに住む5万4,000人の女性公務員は、仕事があるとはいえ、依然として支援を必要としています。1カ月の平均給与は170万アフガニ（38米ドル）で、これは5人家族をおよそ2週間養うのがやっとの金額です。そこで、彼女たちは毎月の食糧配給を受けながら仕事を続け、なんとか家族を扶養しているのです。

2001年10月から2002年11月まで、980万人のアフガン人が金額にして4億7,500万ドルを超える緊急食糧援助を受けました。しかしながら、国の長期的な安定も、サリハのような女性の地位の安定も、まだ確立されていません。2002年11月には早くもアフガニスタンに対する国際社会の関心が薄らぎ始め、WFPでは2003年4月まで援助を継続するのに必要な資金が3,280万ドルも不足しました。





「市場へ行ったときの事です。私は顔を覆っていたことを忘れてしまって、うっかりブルカの上からバナナを食べようとしたことがありました。ブルカのことだけではなく、私たちはひどいめにたくさんあってきました。女性は外出が許されていなかったの、私は家で、詩や記事を書いて気を紛らわせていました。娘にはきちんとした教育を受けさせたいし、戦争の中で成長するような人生を送らせたくはありません。いま私は、女性が置かれている現状とアフガニスタンの女性がどのように生活しているかについて書いていますが、この国の女性問題はどこから手をつければよいのかわかりません。」

サリハ28歳（上写真）、ジャーナリスト

53歳のサキナ（上写真）は、人前でベールを上げたという理由で、タリバン警察に殴打されました。彼女は喘息気味で、顔を覆うブルカを着ていると呼吸困難になってしまうのです。現在、サキナは女性課題省で美容師として働いています。タリバンは美容室も禁じていましたが、同省で事務員として働いている25歳のズーラなど一部の女性は、自宅にこもっていることを利用してこの禁止令を無視していました。

「私は女性たちのために自宅で美容室を開いていましたが、すべてを秘密にする必要がありました。ブルカの下に隠されたモラルは他人にはわかりません。何をしている人間なのか、どんな人間なのか、お互い知りません。私はもう二度と、全身を覆うブルカを着るつもりはありません。女性は人生でやりたいこともできないのだとわかりました。」

バシマ 16歳



ルンナラ 16歳



アグネス 16歳



「正義を得るのはひどく難しいことです。」

レヴ・ブンナ、女性避難所マネージャー、カンボジア

「タイで缶詰を売る仕事があると聞いていたのですが、到着したのは売春宿で、他の女の人からもう逃げられないと言われました。男たちに年齢を尋ねられたときには、まだ13歳だと嘘をついていました。ある日、友だちと他の女の子たち全員が逃亡し、私だけ置き去りになってしまいました。どうしようもなく怖かったです。でも友だちがカンボジアの家に帰り着き、私の母に知らせてくれました。」18歳のファラと16歳の友だちは、2002年の夏、だまされてタイの売春宿に連れていかれました。毎年何人のカンボジア人女性が人身売買されているのかは、わかっていません。1万人から1万5,000人と推定されていますが、正確な数字を把握するのがなぜ難しいのかは、ファラ話を聞けばわかります。ファラは自分の身に起きたことをしゃべりすぎると、また何か起きるのではないかと恐れているようです。彼女は現在、性暴力と家庭内暴力の被害者60人とともに女性避難所で暮らし、食糧援助を受けています。この避難所の場所は極秘です。それはここで暮らす女性たちが暴力的な報復を受けたり、社会的な汚名を着せられたりする恐れが非常に強いからです。「わずか7歳のレイプ被害者や、15歳で売春させられた少女たちもいます」と、避難所のマネージャーのレヴ・ブンナは言います。この避難所は外部の世界を反映しています。カンボジアの売春婦の35%は子どもだと推測されていますが、その多くはタイ、ベトナム、ラオスから売られてきたのです。「彼女たちのほとんどは、親元を離れて仕事を探しに都会へやってきた貧しい家の子どもたちです。彼女たちは自分の婚約者や、ときには隣人や親戚によってマレーシアやタイ、台北へ売られるのです。母親が自分の娘を売る場合すらあります。女性を売買する商人は、オートバイ乗りから社会的地位の高い男性までさまざまです。でも彼らを裁くのは大変困難です。事件を立証できたとしても、ほとんどの場合、彼らは役人に賄賂を

握らせて罪を免れてしまいます。」

シエラレオネのフリータウンに住む18歳のアグネスは、「GOAL」というアイルランドのNGOが実施している、性的虐待の女性被害者と売春婦のためのプロジェクトに参加しています。アグネスは無料で提供される食事のためにセンターに通っており、そこで性と健康、子育て、妊娠などについて学んでいます。「戦争終結以来、売春ビジネスが盛んになっています」と、プロジェクト・コーディネーターのハイディ・ズウィックは言います。「貧しい暮らしをしている少女たちの多くが、反政府軍兵士に拉致されて、軍の野営地でセックスを強要されました。戻ってきても、地域社会の中では汚名を着せられてしまいます。」

戦争が終わったとき、アグネスはフリータウンの町外れにある自宅を去らなければなりません。「戦争で家が爆撃を受け、両親は私を養えなくなりました。彼女は2年前から売春婦として働いています。「私は性病の感染がとても怖いので、もっとお金をあげるからと言われても、男の人には必ずコンドームをつけてもらっています。」

このような国では、安全なセックスが緊急課題です。アジアで最も急速にエイズが拡大しているカンボジアでは、1日あたり平均75件の発症例が報告されています。米国疾病管理センターが実施した2002年の調査によると、フリータウンでの感染率は約6%です。しかしUNAIDSのネフ・ウォーカーは、「実際のところ正確な数字は把握されていません」と言います。「シエラレオネは鉱山やダイヤモンドなどの資源があるため、労働者の出入りが激しいのです。そのため売春婦が増加し、エイズが急速に広がる原因となっています。また、栄養失調とエイズはいずれも免疫機能を弱めるので、病状をさらに悪化させてしまうのです。このような状況は、個人にとっても、家族や国家にとっても悲劇です。」



「銃を使ったことはありません。代わりにナタを使いました。」

アイドリッサ35歳、ケネマ、シエラレオネ

「アミナタというのは戦争のときに私が使っていた名前です。私はカバラの町でケーキを売っていたときに拉致され、無理やり反政府軍に入れられました。それから、戦闘の訓練を受け、銃を使うよう強制されました。その後、私を拉致した男と結婚させられ、今でもその男と夫婦関係にあります。でも、それほどひどい扱いは受けませんでした。私と夫は同じ部隊で戦っており、私は男性100人を部下に持つ副司令官でした。最初のうちはとても恐ろしかったのですが、やがて勇敢になりました。私は上官たちに指示されて、敵の手足の切断と斬首を部下に命令しましたが、自分では絶対にやりませんでした。今でも心が安らぐことはありませんが、もし上官たちに止めろと言っていたら、私が殺されていたでしょう。」

アミナタの本名はエイミーです。「戦いは正しいことだったと思う」と言うエイミーですが、彼女にはその理由を説明することはできません。彼女の祖国シエラレオネは内戦で国土が荒廃し、2000年には平均寿命が26歳以下にまで落ちてしまいました。現在4万7,000人の元戦闘員が社会復帰の支援のための食糧援助を受けていますが、エイミーもそのうちのひとりです。8年にわたる内戦の引き金は、1991年のフォデイ・サンコー率いる「革命統一戦線」(RUF)の武装蜂起でした。反政府軍が最初にめざしたのは、東部にあるダイヤモンド鉱山を支配下に入れることでした。その目的を達成すると、今度はそのダイヤモンドと交換にリベリアのチャールズ・テイラー大統領から武器の提供を受け始めました。RUFの戦闘員の供給源は、教育を受けていない

貧困層の人々で、その中には子どもも含まれていました。彼らを誘拐しては脅し、しばしば麻薬で麻痺させ、兵士として訓練していたのです。

エイミーと同様に、ジョンも反政府軍に捕えられました。「15歳のときでした。『反政府軍に入らないと殺す』、『両親には二度と会えない』と言われました。AK-47銃を渡され、村々を襲撃するよう命令されました。食べ物をもらえないこともありました。時々、青い錠剤を与えられましたが、それを飲むと、ひどく酔っ払った状態になりました。そのような状態のときに、無理やりいろいろなことをさせられましたが、何も覚えていません。"スモールボーイズ"の兵士がいちばん残忍で凶暴でした。逃げたかったけど、できませんでした。逃亡しそうだと思われる、監視役が付けられ見張られました。」

2001年5月、シエラレオネの現大統領アフマド・テジャン・カバが正式に内戦終結を宣言しました。それから2002年1月にかけて、1万4,840点の武器が戦闘員から回収され、ほとんどが溶解処分されました。右ページの写真は回収された武器の一部です。

「多くの争いの根本的原因は貧困、特に食糧難です。長年の戦争で荒廃した国土を建て直そうと努力している国々では、食糧援助が平和の実現に重要な役割を果たしています」と、WFPのシエラレオネ事務所長、ルイス・インプロウは説明します。「お腹いっぱい食べられて、明日も食べ物が手に入る希望がある人は、武器を手にとろうとは思わないものです。」





これら6人の女性は、シエラレオネのカイラハンにある元戦闘員のためのINTERWOSTRACKセンターで食糧の配給を受けています。彼女たちは全員がRUFのメンバーでした。同センターには現在97人の女性がいますが、その多くが内

戦中に身体的暴行を受けており、7割以上の女性には、内戦時の強姦が原因で生まれた子どもがいます。この6人の女性は現在、美容師になるためのトレーニングを受けています。

左上から時計回りに：ファティマ23歳
クラ16歳
マミー31歳
匿名
パトリシア25歳
イサタ38歳

「恐怖が私たちを駆り立てました。」

ローズ22歳



「私は彼らを許しましたが、神は彼らを罰するでしょう。彼らを見かけても何もしません。許しはしますが、絶対に忘れません。」

アルファ24歳、ジュイ再定住キャンプ、シエラレオネ

「私」はフリータウンに住んでいて、夫と9人の子どもたちと一緒に食堂を営っていました。反政府軍が町を襲撃したとき、夫は子どもたちをかき集めて走って逃げましたが、イブラヒム（息子、右写真）がまだ7ヵ月だったので、私は走るができず夫と離れなければなになってしまいました。RUF（革命統一戦線）の司令官は捕らえた人々に、『お前らを全員殺す』と言いました。あたりはとても暗くて、そこに何人の兵士がいたのかはわかりません。兵士は男性と女性を別々に並ばせ、まず男性を撃ち始めました。次に、女性に銃を向けました。私は『殺さないで』と懇願しましたが、兵士は私の両足をナタで切り落としました。兵士は私に向かって、『テジャン・カバ（大統領）の所へ行って新しい足をもらってこい。この国に民主主義はいらない』と言いました。

私はイブラヒムを抱いたまま、その場からずっと動けませんでした。イブラヒムは泣き、私は食べ物も鎮痛剤もなく、あたり一面の死体に囲まれてただ横たわっていたのです。2日後に、政府軍の兵士が私を見つけ、『気の毒に』と言ってくれました。イブラヒムと私は病院へ運ばれましたが、私の足は壞疽を起こしていたため、さらに上のほうから切断しなければなりません。死にたくなくなりました。」

「平和を維持するために、政府と国民がしなければならない重要なことが3つあります。第一に、戦争で母親や父親を失った子どもたちを保護すること。第二に、教育も受けておらず、何もすることがない元戦闘員のことを考えること。彼らは、忙しく何かをして内戦のことを忘れる必要があります。第三に、手や足を切り落とされた被害者の子どもたちの気持ちにも配慮し、報復行動を防ぐこと。現在まだ4歳のイブラヒムですら、『誰がお母さんにこんなことをやったのか知りたい。お母さんの足を切り落としたやつを撃ちたい』と言っています。」

1999年1月、RUFの反政府軍兵士がフリータウンから退却する際、442人の住民の手足を切断するなどの重傷を負わせました。42歳のカディアツ（右写真）もそのときの被害者のひとりです。ECOMOG（西アフリカ諸国平和維持軍）がRUFをフリータウンから排撃しにかかる、RUFは民間人の手足をナタで切断し始めたのです。カディアツは現在、フリータウン郊外にあるグラフトン定住キャンプに住み、ひき割り小麦、豆類、植物油、塩などの配給を受けています。しかし、このキャンプで暮らす人たちが最後の配給を受けたのは、物資がなくなる以前の、2002年10月のことです。



「あのとき、いっそのこと殺してほしかった。今では、正義がほしい。」

ムスタファ49歳





「アフガニスタンは、薬が必要な病人のようなものです。」

カリク・ダッド、アシュカン・アンド・アリファン・スクール、アフガニスタン

「タリバンは教育の敵でした。特に女性にとっては。」そう言うのはカブールにあるアシュカン・アンド・アリファン・スクールの42歳の校長、カリク・ダッドです。「教育は男にも女にも大切なものですが、女性にとっては特に重要です。子どもを育てるには、教育が必要です。私は生徒たちを暗闇から光の中へ救い出したいのです。」

現在、1,300人を超える6歳から13歳の少女がアシュカンへ通っています。1992年から1996年の対立派閥間の戦闘により、校舎はほぼ完全に破壊されてしまいました。このときの無差別砲撃と爆撃により、何万人ものカブール市民が殺されました。そのため今でも授業は戸外で行われており、子どもたちは埃っぽい床に敷物を敷いて座らなければなりません。

そのあとタリバン政権が樹立したのです。「わたしは5年間も勉強できませんでした」と、13歳のカミラは言います。「タリバンが政権を支配している間は、ずっと家にいました。今は、ひとつのクラスにいろいろな歳の子がいて、ダリー語や算数やコーランを勉強しています。」1996年から2001年まで、女子の教育は全面的に禁止されていました。また、男子もマドラサと呼ばれるイスラーム神学校以外に通うことは許されませんでした。「白い帽子をかぶらないと外出できないし、通りで女の子や大人の女性と話をすることも禁止されていました」と言うのは、フランスのサッカー選手ジネディーヌ・ジダンのファンだという13歳のムシフラーです。「僕は学校へ通い続けたけど、ターバンをかぶらなければならなかったし、女の子もいませんでした。

学校はモスクへ移されてしまいました。」

アシュカン・アンド・アリファン・スクールの授業は再開されました。しかし、ここは世界で最も貧しい国の、最も貧しい地区にある学校です。そのことはつまり、大半の生徒たちは働かなければならないという意味なのです。例えば、12歳のマスード（表紙）は学校へ行ったことがありません。水を売る仕事をしているのです。彼の夢は、仕事が楽になるようにカートを買うことだといいます。このような現状を踏まえ、アシュカンの生徒にはフラットブレッドという丸くて薄いパンが毎日1個ずつ配給されています。パンのために子どもたちは学校へ来るだろうし、親たちも子どもを一日中働かせるのをやめて学校に行かせるだろう、という狙いからです。もらったパンは、ほとんどの生徒が家へ持ち帰ります。

学校には57人の教師がいます。教師たちは、1カ月わずか150万アフガニ（およそ31米ドル）という給料にもかかわらず、授業を続けていこうと固く決意していますが、やはり食糧の配給を受けて収入を補わなければなりません。「教育を受けないと、私たち自身のことも、自分たちの社会のことも、そして他人のことも理解することはできません」と、55歳の教師モハメッド・アミンは言います。「子どもたちに教育を施し、ウズベク族、ハザラ族、タジク族、パシュトゥーン族などというように区別する考えをやめて、ひとつの国民として団結するようになれば、ものごとは変わっていると思います。」

左上から時計回りに：マキラ8歳
ムシフラー13歳
ラジア7歳
カリク・ダッド42歳



ハロウン6歳



「お医者さんになりたい。」

アーゾ7歳



「あるとき、お兄ちゃんがゴミ捨て場で見つけたニワトリを家に持ち帰ってきました。家族全員が食中毒になりました。」

ロアシー6歳、カンボジア

カンボジアの首都プノンペンの郊外にあるスタン・ミーン・チェイのゴミ捨て場の存在は、遠くからでもその匂いですぐにわかります。あたりの空気は、腐敗が進むゴミの悪臭と、燃える廃棄物の山から出る煙で重く垂れ込めています。ここには、毎日100万人のプノンペン住民が出す400トンを超えるゴミが運ばれてきます。足の下の地面は柔らかく弾力があり、踏むと最初は固さがありますが、そのうちじわじわと黒い有毒の液体が染み出てきます。この異様な光景の中心に、廃棄物で作られ、ハエが群がるみすぼらしい小屋が建っています。それらはここで廃品回収をして暮らしている人たちの家です。スタン・ミーン・チェイとその周辺には、このような人たちがおよそ5,000人も暮らしています。彼らにとって、このゴミ捨て場は家であり生計の場でもあるのです。

毎朝6時になると、400人の子どもたちがゴミ捨て場を出て、"For the Smile of a Child"というNGOの施設へやってきます。週末にはその数は700人になります。彼らはここでシャワーを浴び、朝食をもらってから廃品回収の仕事を始めます。9歳のドン（次ページ写真右）と7歳のマオ（同左）の兄弟は、それぞれ1日約2,000リエル（0.5米ドル）を稼ぎます。「僕たちはプラスチックのボトルや缶を集めています」とドンは言います。「集めたものをベトナムのリサイクリング業者に売ります。」子どもたちはみな、実際の年齢よりずっと幼く見えます。カンボジアの子どもたちの45%が栄養不良で発育が阻害されていますが、ここの子どもたちも同様です。ここで毎朝

もらう朝食が、その日の唯一の食事ということもしばしばあります。

「観光業でよい仕事があると聞いてプノンペンにやってきたものの、資格がないために仕事が見つからず、面目を失うのが恥ずかしくてそのまま村にも帰れずに、最終的にゴミ捨て場で暮らすようになる家族が多いのです」と、"For the Smile of a Child"のティー・アカラ・ルドヴィックは言います。「しかし、タダでここに住めるわけではありません。ここにも厳密な階層があります。各家族が家賃を支払わなければならない、働いてよい時間も決められているのです。」

"For the Smile of a Child"では、ゴミ捨て場に住む子どもたちが何らかの資格を取得できるように、学校と訓練センターの運営も行っています。ここにいる831人の子どもたちは、以前全員が廃品回収をしていました。子どもたちは学校で給食を食べ、親も、子どもが学校へ行くことで失われた分の家計を補うため、食糧の配給を受けています。学校を終えた年長の子どもたちは、成長著しいカンボジアの観光産業で職が得られるように、訓練センターでトレーニングを受けます。（例えば、子どもたちはフランス人シェフから料理を習ったり、ゲストハウスで仕事を手伝ったりしています。）カンボジアでは250万人の子どもたちが働いていますが、食糧援助は、スタン・ミーン・チェイに住む子どもたちに、労働に終始する子ども時代から抜け出し、誰かが捨てたゴミをあさるだけではなく、もっと広い世界を見るチャンスを与えています。



カンボジアのシエム・リアップにある県立リハビリテーション・センターは、地雷で負傷し障害者になった人を常時30～40人ほど受け入れ、食糧を配給しています。10日間の滞在中に、約50米ドルのポリプロピレン製の装具を作り、身体に合わせ、装着します。（右写真の装具は、木材と薬きょうで作った手作りの装具です。）

カンボジアでは毎日およそ80人が地雷により死亡したり手足を失ったりしています。地雷を地中から1つ撤去するのに1,000ドルかかりますが、国内には未処理の地雷がまだ400万から600万个残っています。



「リベリアには何もありません。子どもたちをここに連れて来たのは、とにかく、どこか落ち着く場所が必要だからです。」

ジェームズ・デニス、コーラ難民キャンプ、ギニア

面積がイギリスの2倍近くあるマノ川流域は、アフリカの中でも、ダイヤモンド、森林、石油などの天然資源が最も豊富な地域のひとつです。しかし、ここの住民は世界で最も貧しいと言われています。過去10年間、武器、ダイヤモンド、難民が国境を越えて自由に行き来し、ギニア、シエラレオネ、リベリアを含むこの地域全体の平和は戦争によってかき乱されました。リベリアで続いている内戦は、隣国ギニアとシエラレオネがやっとのことで保っている治安を脅かし続けています。

2002年8月、ギニアは、チャールズ・テイラー大統領の支配と国内の派閥間紛争から逃れてきた5万人近いリベリア難民に避難所を提供しました。シエラレオネからも4万1,000人の難民を受け入れました。ヌゼレコレ近くにあるコーラ難民キャンプでは、7,000人のリベリア移民に食糧と住居を提供していますが、そのうちの多くが難民生活はこれで2回目だといいます。6歳のクラリス・デニスはギニアの難民キャンプで生まれました。クラリスは1999年に本来の母国であるリベリアを初めて訪れましたが、1年も経ないうちに戦争が再び始まったため、家族はコーラに戻ってきました。「リベリアでは、キャベツ、キャッサバ、米、胡椒など自分たちで食べるものを作っていましたが、家が焼かれてしまいま

した」と、クラリスの父のジェームズは言います。ジェームズは現在、キャンプでWFPから支給された米と野菜を育てています。

コーラはまるで小さな町のように、碁盤の目状の未舗装の道路に沿って、学校や小屋が立ち並んでいます。市場もあって、難民がひき割り小麦や豆類などの配給品を売って、ピーナッツバター、パーム油、ヤシ酒、タマネギ、マカロニなどと交換することもあります。このように配給が受けられ、市場でさまざまな食品が手に入るにもかかわらず、多くの子どもたちが、寄生虫で汚染された水を飲んで腹部が膨張するなど、健康・栄養上の問題を抱えています。

ジェームズが祖国へ帰るのは、もう不可能のように思われます。「国中が破壊されました。もう、あの国には何もありません。父は政府で働いていたために殺され、母もどこかに連れていかれました。よく父と母の夢を見て、ここで一緒だったらどんなにいいかと思います」とジェームズは言います。「ここでは、夜になると人々が動物狩りをしていますが、その音を聞くとリベリアを思い出してよく眠れません。このキャンプを私の家族が安全に住める場所へ移動してほしいということだけが、唯一の願いです。」

左上から時計回りに：マワタ7歳
クラリス6歳
コトー5歳
モニール11歳



「この国には、自分の家が自分の墓という言い回しがあります。ここが私たちの家です。再び他の国へ行くことはできません。」

モハメッド・バラット、ブリ・チャルキ帰還民センター、アフガニスタン

2001年10月、タリバンに対して米国軍主導の攻撃が始まったとき、モハメッド・バラットは妻と7人の子どもたちとともに、アフガニスタンを出国してパキスタンへ向かいました。彼らは今、ブリ・チャルキ帰還民センターを経て、自分たちの故郷へ帰ろうとしています。この帰還民センターは、アフガニスタンに設けられた7つの再定住センターのうちの1つで、同名の悪名高い刑務所からカブール・ジャララバード街道をさらに下った先にあります。

2002年3月以来、90万の難民がこのセンターを経由して帰郷しました。40歳のモハメッドもそのうちのひとりですが、通常なら手続きは数時間ですむところ、必要書類が見つからなくなったため、有刺鉄線のフェンスで囲まれたセンターの埃っぽい構内で6日間も寝泊りしています。「妻は泣いていますし、子どもたちの具合も悪くなり、悲惨な状態です。パキスタンでの暮らしは厳しく、私たちは子どもたちに草の根っこを食わせて生き延びていました。いま欲しいのは私の必要書類と食べ物です。ただ家に帰りたいのです。」

ブリ・チャルキにたどり着いた難民の多くは、長旅で茫然自失しており、家は爆撃で破壊されていないか、親戚は生きているか、仕事は見つかるだろうかなど、帰還してからの見通しについてもさまざまな不安を抱えているようです。この中には、20年以上も国外で生活していた人や、国外で生まれた子どももいます。毎日、150から250の家族が、2カ所の国境検問所を経由してキャンプに到着します。（検問所はキャンプまで歩いて4時間の距離のパキスタンのクエッタと、丸1日かかるイランのトルファンにあります。）難民は故

郷に最も近いキャンプに行きますが、援助物資を目当てに何度も出入りする「回転ドア」難民を阻止するために、キャンプは意図的に国境から遠く離れた場所に設置されています。センターに到着した人々には、ビニールシート2枚、洗剤1キロ、米50キロが配給されます。

2002年春にアフガニスタンの国境が再び開いたとき、UNHCRは帰還してくるアフガン人を80万人足らずと見積もっていました。国内の治安が悪く、社会インフラが大きく破壊されているため、多くの難民が帰還を思いとどまるだろうと考えていたからです。しかし、2002年11月までには、イランとパキスタンから180万人のアフガン人が国境を越えて戻ってきました。「村民がヨーロッパに移住を望んでいるというのは作り話です」と、UNHCRのレイチェル・ロドリゲスは言います。「爆撃で破壊されようと、土地が不毛であろうと、自活が難しかろうと、ここは彼らの国です。ここが彼らの故郷なのです。」

帰還者にとって、最初の数カ月間の生活は非常に苦しいものになります。社会インフラが整備されていない地域で、食糧や仕事を見つけるのは困難です。そこでWFPとNGOは、労働の対価としての食糧援助(Food-for-work)プログラムに資金を出しています。帰還者は道路や学校、病院の建設に携わる代わりに毎月の配給を受け取ります。これによって、人々は自分の町や村に留まることができ、アフガニスタンの再建も開始できます。

2002年末までに、約200万人のアフガン人が帰還しました。WFPには150万人分の食糧購入資金しかなく、2002年11月にはブリ・チャルキでの配給量を60%以上削減せざるを得ませんでした。

ベナジール8歳
シャリファ6歳



アクルミナ9歳



パナ12歳



WFPは世界最大の人道支援機関です。WFPと多くのNGOによる努力の結果、飢餓に苦しむ人々の数は、1960年の3人に1人から現在の7人に1人に減少しました。2003年、WFPは81カ国で1億400万人に食糧援助を行いました。WFPは人命を救うとともに、戦争や干ばつ、経済危機、弾圧、政情不安、HIV/エイズなどがもたらした貧困から、人々、特に女性と子どもを救済するために活動をしています。WFPは政治とは無関係な機関であり、各国政府、団体、および個人による任意の寄付のみを資金源としています。オンラインで寄付をする方法と現金での寄付の送付先については、www.wfp.orgをご覧ください。

WFPは、他の国連機関や1000を超える世界中のNGOと協力して多くの食糧援助プログラムを実施しています。私たちは、援助を必要としている人に確実に食糧が届くよう貢献し、さらに本冊子『HUNGER』の制作にあたって多大なご支援とご助力をくださった以下の機関、団体および個人の皆様に感謝いたします。

ギニアUNHCR－コーラ難民キャンプ／グエッケドウ・ウーメンズ・コレクティブ・シエラレオネ・ゼニス・コミュニティ教育センター／INTERWOSTRACK／GOAL／アフガニスタン女性課題省グラフトンとジュイ再定住キャンプの住人の皆さん／アシュカン・アンド・アリファン・スクール／UNHCRカンボジアFor the Smile of a Child／ウィメンズ・クライシス・センター／シスターズ・オブ・チャリティ／パートナーズ・イン・コンパッション／シエム・リアップ県立リハビリテーション・センター／ハンディキャップ・インターナショナル

『HUNGER』の刊行にあたり、WFPはBenettonに厚くお礼申し上げます。『HUNGER』の中で述べられている見解、意見、情報は、必ずしもWFPの立場を反映するものではありません。冊子中でご紹介した人の名前のいくつかは、彼らの安全を考慮して変更されています。



UNITED COLORS
OF BENETTON.

WFP 国連世界食糧計画日本事務所
〒220-0012 横浜市西区みなとみらい1-1-1
パシフィコ横浜6階
Tel: (045) 221-2510 Fax: (045) 221-2511
ホームページ: <http://www.wfp.or.jp>

WFP Public Affairs Service
Via Cesare Giulio Viola, 68/70-00148 Rome, Italy
Tel: +39-066513-2628 FAX: +39-066513-2840
Homepage: <http://www.wfp.org>
e-mail: wfpinfo@wfp.org